

織田得能編輯

蓮如御略傳並御垂訓
上人

光融館發行

B 36

蓮如上人御略傳並御垂訓

織田得能



○御畧傳

蓮如上人は人王百一代稱光天皇の御宇應永二十二年二月廿五日の御誕生にて。足利には四代の將軍義持公の時なり。祖師聖人御入滅より百五十四年の後なりき。

のらりて案するに。祖師聖人御在世の當時。眞宗の繁昌四海に比類なかりしが。龜山天皇弘長二年北條時宗執權の時御入滅遊はされ。其より殆ど六十年。すなはち御本廟には三代目の善知識覺如上人の御代始め頃までは。北條の治世にて。天下泰平四民みな豊樂をよ

蓮如上人御略傳

ろこへり。隨て御宗門も追々御繁昌の勢なりしも。其より後は即ち後醍醐天皇の後宇に相成り。元弘の亂とて北條を滅され尋て足利尊氏の謀反により天下を擧げて大騷亂となりし。是れ覺如上人の御代中頃の事にて御本寺は其頃今の東大谷の邊にまこませしが。京中數度の合戦に由て遂に兵火に罹り。覺如上人は一時兵難を近江國に避け玉ひし程なり。其より殆ど七八十年。四代目の善知識善如上人より綽如上人巧如上人存如上人に至る御代々の中は。所謂南北朝の戦にて。天下は修羅の衢なり。其より足利三代將軍義滿公に至て漸く和睦に相成り。南北の兩朝僅に一致せしも。元々足利は反逆を以て天下を取りしことなれば。義滿公世を去りし後は。兎角紛擾たえまなく。北條か治世の萬一に及はぬことは少

しく歴史を緋けは判然たり。隨て禪宗だけは足利氏の宗旨ゆへ。斯る世の亂にも拘らず。獨り隆盛をきはめ。其が爲め尊氏義詮の時代に叡山より達磨宗退治の嗽訴を受けしほごなれども。吾浄土眞宗の如きは。元々平民百姓を御相手に下主愚凡の輩を教化せらるゝを本意とする宗門なれば。かゝる世の中には最も影響の及ぶ者で。朝に夕に弓矢に追ひ立てられ。兵糧賦役に虐けらるゝ當時の躰たらく。たとひ有縁の機なりともいかにして佛法を聽聞すへきや。又御本寺ごてもいかにして化導の方便を盡さるへきや。四海に比類なき浄土眞宗も今は衰退より外はなきぞ。されは七代目の善知識存如上人の頃には。萬事御不辨にて本堂は三間四面。御影堂は五間四面なり。遠國より上洛の人も希なりけれ

は。出入でいりの人も多おほからす。先啓師せんけいしの書かかれたる蓮如上人縁起えんぎ云ふ書しよにも記しるせり。蓮如上人は此存如上人の御子みこ様さまにて。御幼年ごせうねんの時ときの御貧みんまうしさ。申まうすも恐おそれ多おほきことのみなり。御一代聞書ごいちだいききによろつ御迷惑ごめいわくにて。油あぶらをめされ候はんに御用脚代ごようきゃくだいなく。やうやう京きやうの黒木くろぎをすこしつゝ御ごり候て。聖教しやうきやうなご御覽候由ごらんごうに候。又少々またしやうくは月の光ひかりにても聖教をあそばされ候。御足ごあしをも大概水たいたいにて御洗候ごあらひ。亦また二三日も御膳ごぜんまいり候はぬことも候由。承うけりをよひ候。

前々住上人ぜんぜんぢゆうしやうにん蓮如上人にんは昔むかしはこふくめを召めなれ候。白小袖しろこそでにて御心ごんこころやすぐ召めされ候御事ごんごも御座ござなく候由に候。いろく御ごかなじかりける事ことも折々御物語候おれづれごんものがたりごう。今々いまの者ものはさやうの事ことを承うけり候て。

冥加みやがを存たもずへきの由よしくれく仰たほられ候。人をも甲斐かひく敷しめしつかはれ候はであるうへは。幼童おとぎの襦袢じゆばんをもひこり御洗候ごあらひなど仰たほられ候。又仰たほられ候。御貧ごんまうしく候て。京きやうにて古ふるき綿わたを御とり候て。御一人ごいちにんひろげ候ことあり。又御衣ごんころもはかたの破やぶたるを召めされ候。白しろき御小袖ごんこそでは美濃絹みのぬのわろきを求め。やうく一つめされ候由仰たほられ候。當時たうじはかやうの事ことをも知しり候はで。あるべきやうに皆々存みなくし候はごに。冥加みやがにつき申まうすへし。一大事いちだいじなり。

御油料ごんあぶらりやうさへ之これれなく。二三日か間あいたも御膳ごぜんまいらす。稚子ちこの襦袢じゆばんまで御すごぎごは何なにたるあさましき御ごありさまにや。御宗門御衰退ごんしゆもんごんさいたいのほごも推計おしはかりれてあはれなり。萬一ばんいち此このありさまて推おし行き。蓮如

上人中興の恩なかりせは眞宗の法燈はいかゞあるへきや。
茲に蓮如上人は斯る困難の世に御出世まこく。御年四十三歳に
て存如上人の御跡を御相續あそはさる。即ち人皇は後花園天皇長
録元年足利義政公の時なり。如何にもして二宗を再興し。彌陀の
本願を世に弘めんとどの御宿願まし。御幼年の頃より博く内典
外典に涉らせられ。殊に祖師の聖教には深味をかみ碎かせられ。
南無ごたのめば阿彌陀佛の助け玉ふご云ふ道理を如何なる愚凡の
やからまでも會得の出來るやうに御教化あそばされ。又御身の貴
きをも願み玉はす。平民百姓ご同座をくむで。御同朋御同行ごむ
つませ玉へり。されは實悟記卷一に。

昔は東山に御座候時より。御亭は上壇御入候ご各物語候。蓮如

上人御時上壇をさげられ下壇と同物に平座にさせられ候。その
故は。佛法を御弘め御勸化につきては。上臈ぶるまひにては成る
べからず。下主ちかく萬民を御誘引あるへきうへは。いかにも
く下主ちかく諸人をちかく召して御す。めあるへきとの御事
にて候と仰られ候て。平座に御沙汰候。ありがたき御事ご諸人
申したるとて各宿老衆かたり申され候云云

又御一代聞書に

蓮如上人仰に。身をすてゝをのくと同座するをば。聖人のお
ほせにも。四海の信心の人はみな兄弟ご仰られたれは。我も其
の御ごこばのこごくなり。又同座をもしてあらは。不審なるこ
ごをも問へかし。信をよく取れかしご願ふばかりなりご仰られ

候なり。

御化導の御趣意と云ひ。其御ふるまひと云ひ。いかにもく下主愚凡の根機に相應しければ。將に消なんとせし淨土眞宗も。旭の天に上る勢にて愈繁昌し。御住持殆と十年にて。東山の御本寺に日華門と云ふを立てさせらるゝに至れり。

さて濁世のありさまで。此日華門が叡山の妬となり。彼等が不意の攻め撃に取る者も取りあえず。僅に祖師の御眞影を奉して。江州大津に難を避け玉ひし。これ寛正六年正月。上人御年五十一歳の御時なり。其より叡山の僧徒と和を講せられ。六七年の間。江州堅田南列處。三州土呂。泉州堺等に移住しまし。遂に文明三年を以て北國を御巡化あそはされ。越前吉崎に於て一字を建立

あそはさる。御文一帖目第八通に此事を記し玉へり。

文明第三初夏上旬のころより。江州志賀郡三井寺南別所邊よりなにとなく不圖しのびいて。越前加賀諸所を経廻せしめおはりぬ。よて當國細呂宜郷内吉崎といふ此在所すぐれておもしろきあいた。年來虎狼のすみなれし此山中をひきたいらけて。七月二十七日より。かたのことく一字を建立して昨日今日とすきゆくほとり。はや三年の春秋はをくりけり。云云

是に於て加賀能登越中越後信濃出羽奥州七箇國の門下のたくひ。此吉崎に群集し。國守朝倉敏景までも深く御皈依ましくしこのとなるが。加賀の守護職富樫介なる者が。故ありて國內の御門末ご不和を生し。遂に吉崎に押し寄せんとするを聞き玉ひ。文明七

年吉崎を退去あそはされ。海を渡りて若狹に至り。丹波攝津を經て河内の出口につかせらる。吉崎御滞在は文明三年より同七年まで前後五ヶ年にて。御文の御製作もおほくは此御滞在中にありて教興の因縁最も此時に熟し。邊鄙の群類あまねく化導に沾へり。今にして北地一帶眞宗の盛なるも。此五ヶ年の御遺化に由ること言ふも更なり。

さて河内の出口には光善寺といふを御建立あそはされ。同時に富田の教行寺堺の眞宗寺をも御創立相成りしか。當時世上の躰たらく如何と申すに。正に足利義政公の末路にて。京都には細川山名が争ひにて去ぬる應仁元年より文明九年まで都合十一ヶ年の戦争あり。隨て其徒黨が國々に於て互に騒亂せしこととて。難澁至極の

世の中。史家は之を戰國時代とぞ稱せり。されは御文四帖目第三通文明九年九月の御詞に

夫れ當時世上の躰たらくいつのころにか。落居すへきごもおほははんへらさる風情なり。しかるあいた。諸國往來の通路にいたるまでもたやすからさる時分なれば。佛法世法につけても千萬迷惑のおりふしなり。これによりて。靈佛靈社參詣の諸人もなし。云云

ご御嘆あそはされたるは實に當時のありさまなりき。かゝる世の中にも御化導の功勳益顯はれ來り。文明十二年には城州山科の里に於て祖師の御影堂其明年は御本堂を御建立に相成り。之を御本寺と定めさせらる。即ち吉崎御退去後山科の御本寺御建立に至る

三四年の間は。攝河泉の境に御化導ましくしなり。
山科御移住後正に十年。延徳元年。上人御年七十五歳にて。九代
目の善知識實如上人に御代を譲らせられ。御身は御隠居にて信證
院に稱せられき。されど御化導の一事は益熾に。有縁の濟度一日
も忽せにし玉ふことなごなり。即ち御隠居後七年。明應五年。
八十二歳の御年を以て大坂の勝地を發見ましく。一宇の坊舎を
たてられ。面白き在所かなごの御賞翫にて。茲に三年御隠居まし
く。當年御年七十四歳にて長々の御辛勞により。御再興の御
宿志も此に達せられ。一宗の法義彌さかりなりければ。今は本望
のいたり仰らる。御一代聞書に。
何事をも思召まゝに御沙汰あり。聖人の御一流をも御再興候て。

本堂御影堂をもたてられ。御住持をも御相續ありて。大坂殿を
御建立ありて。御隠居候。然は我は功成り名遂て身退くは天の
道也といふこと。其れ御身の上なるへき由仰せられ候と。
又御文四帖目第十五通の御詞に。

愚老すでに當年は八十四歳まで存命せしむる條不思議なり。ま
ここに當流法義にもあひかなふ歎のあいた。本望の至りこれに
すぐへからさるもの歎。云云

御得意御満悦の程恐察せらる。是れしかしなから興法利生の御念
力一つに由ること申すも愚かなり。されは御一代聞書に此事を記
して

蓮如上人。御若年の比。御迷惑のここにて候ひし。たゞ御代に

て佛法を仰せられたる思召候御念力一つにて御繁昌候。御辛勞ゆへに候。

御病中に蓮如上人仰られ候。御代に佛法を是非も御再興あらんご思召候御念力一つにて。かやうに今まで皆々心やすくあることは。此法師が冥加に叶ふによりてのことなりご御自讃ありご。

蓮如上人細々御兄弟衆等に御足を御見せ候。御わらぢの緒くひ入り。きらりと御入候。かやうに京田舎。御自身は御辛勞候て。佛法を仰せ開かれ候由仰られ候ひしご。

御念力一つの爲にさしたる御辛勞にて御本望は終にとけ玉ひしが。御身は明應七年夏の初より御不例にましく。翌年の春一旦

山科の御本殿へ御皈の後。終に三月二十五日と云ふを以て。利生の化縁此に盡き。往生の素懷を遂げ玉ひけり。時に後土御門天皇明應八年。足利十一代の將軍義澄公の時なり。御壽は八十五歳にてましくき。

熟々御一代の御事績を案するに。上人は眞宗再興の爲に權化の再誕なりご云ふご。おさく疑ひなきもの歎。前後にためしなき長々の亂世。隨ふて御一宗の衰退其の極りに達せし時に於て。花洛より邊鄙に至るまで。苟めにも有縁の土地は限なく御化導あそはされ。殊に吉崎山科大坂の如き何れも要害便利の地に開教の基を立て玉ひしご。其の御卓量ご云ひ。御辛勞ご云ひ。心も詞も及はれずなり。其御辛勞にこたへて。御在世の當時は言ふも更な

り。御往生の後には彌が上にも御繁昌にあひなり。第一の證據には九代目の善知識實如上人の御時。忝くも後柏原天皇御即位の御料を献納せられ。爲に准門跡の勅許を戴かせらるゝに至れり。長の争亂にて朝廷も殊の外御不自由にましく。後柏原天皇が御即位の後二十一年間も。御即位の大禮を擧げさせらるゝこと叶ざりしを此方より莫大の御料を献納されて御忠勤申されしなり。其ご申すも御一宗か御繁昌のゆへなり。之を存如上人の御時東山の片ほこりに僅か三間四面の御堂にて。參詣の人もなく。公達方が日々の御膳にさへ。さしつかへられし御有様に比ふれば如何なりや。蓮如上人は眞宗再興の明師なりしこと是に於て知るべきなり。さて斯る御高德は吾々の仰き尊ふのみならず。忝くも朝廷においても。

其御遺徳を御追賞ましく。去る明治十五年。上人御遷化の日を以て慧燈大師と云ふ御諡號を賜られしこと。只感泣より外はなきなり。

○御垂訓

一王法は額にあてよ。佛法は内心に深く蓄へよとの仰に候。(御一代聞書)

一わか往生の一段にをいては。内心にふかく一念發起の信心をたぐはへて。しかも他力佛恩の稱名をたしなみ。そのうへには。なを王法をさきごし。仁義を本とすへし。また諸佛菩薩を疎客にせず。諸法諸宗を輕賤せず。たゞ世間通途の儀に順して。外相に當流法義のすかたを他宗他門のひとにみせざるをもて。當

流聖人のおきてをまもる眞宗念佛の行者といひつへし。(御文四帖目第一通)

一ほかには王法をもておもてこし。内心には他力の信心をふかくたくはへて世間の仁義をもて本とすへし。これすなはち當流にさたむるところのおきてのをもむきなりとこころうへきものなり。(御文二帖目第六通)

一王法をもて本とこし。仁義をさきこして。世間通途の儀に順して。當法安心をは内心にふかくたくはへて。外相に法流のすかたを他宗他家にみえぬやうにふるまふへし。このころをもて當流眞實の正義をよく存知せしめたるひととはなつくへきものなり。(御文三帖目第十二通)

一されは聖人のいはく。たごひ牛ぬす人どはいはるこも。もとは後世者。もとは善人。もとは佛法者ごみゆるやうにふるまふへからすどこそおほせられたり。(御文二帖目第二通)

一ちかころは。當流念佛者のなかにおいて。わざと人目にみえて。一流のすかたをあらはして。これをもて我宗の名望のやうにおもひて。ここに他宗をこなとおこしめんとおもへり。これ言語道斷の次第なり。さらに聖人のさだめまじくたる御意にふかくあひそむけり。そのゆへは。すてに牛をぬすみたる人どはいはるこも當流のすがたをみゆへからすどこそおほせられたり。この御ことはをもてよくこころうへし。(御文二帖目第十三通)

一同行の前にてはよろこぶものなり。これ名聞なり。信のうへは

一人居てよろこぶ法なり。(御一代聞書)

一 佛法をあるじとし。世間を客人とせよといへり。佛法のうへよりは。世間のことは。時にしたかひ。相はたらくへき事なり。

(御一代聞書)

一 一諸法諸宗にもこれを誹謗すへからず。一諸神諸佛菩薩を
かろしむへからず。一信心をこらしめて報土往生をこぐへき事。

(御文二帖目第三通)

一 佛法には無我と仰られ候。我と思ふことはいさゝかあるまじきことなり。われはわろしとおもふ人なし。これ聖人の御罰なり。御詞候。他力の御すゝめにて候。ゆめく我といふことはあるまじく候。无我といふ事。前住上人も度々仰られ候。(御一代聞書)

一 誰の輩も我はわろきと思ふもの一人としてもあるへからず。これしかしながら。聖人の御罰をかうふりたるすがたなり。これによりて一人つゝも心中をひるがへさすば。ながき世泥梨にふかくしづむへきものなり。これといふもなにことぞなれば。眞實に佛法のそこをさらさるゆへなり。(御一代聞書)

一 總躰人にはをどるまじきと思ふ心あり。此心にて世間には物をしならふなり。佛法には无我にて候うへは。人にまけて信をこるへきなり。理をみて情を折るこそ佛の御慈悲よと仰られ候。

(御一代聞書)

一 善き事をしたるがわろきことあり。悪き事をしたるかよき事あり。善き事をして。我は法義に付てよき事をしたると思ひ。

我われごいふ事あれはわろきなり。あしき事をしても。心中しんちゆうをひるがへし。本願ほんがんに販うすればわろき事をしたるがよき道理だうりになる由仰おほせられ候。(御一代聞書)

一兼譽兼縁けんよけんえんにの御兄弟おんけいだい對たいせられ仰おほせられ候。實如上人じつにょじん前住上人ぜんじゆうじん蓮如れんにょの御恩おんおんにて今日こんにちまで我われと思ふ心こころをもち候はぬがうれしく候ご仰おほせせられ候。誠にありかたくも又は驚入おどろこ申候。我人われひとかやうに心得申てこそは。他力たうりきの信心しんじん決定けつじゆう申たるにてはあるへく候。(御一代聞書)

一我わればかりと思ひ。獨覺心どくかくしんなること。あさましきことなり。信しんあらば佛の慈悲じひをうけごり申す上は。我わればかりと思ふことはあるまじく候。觸光柔輦そつくわうじゆなんの願候ねがひときは。心もやはらくへきことなり。

これは縁覺えんかくは獨覺どくかくのさごりなるかゆへに佛にならざるなり。(御一代聞書)

一一句一言いっくういっごんも申す者は。我われご思て物を申すなり。信しんのうへは我われはわろしと思ひ。又報謝ほうしゃと思ひ。ありかたさのあまりを人にも申すことなるへし。(御一代聞書)

一皆人毎みなひとごとによき事をいひもじ。働はたらくすることあれば。眞俗しんぞくともに。それを我われよき者にはやなりて。その心にて御恩おんおんといふことはうちわすれて。我心わがこころ本になるによりて。冥加みやがにつきて。世間佛法よこみやうぶつぽうごもに。悪あくき心が必ずく出來しゆするなり。一大事いだいじなり。(御一代聞書)
一信しんをえたらは。同行どうぎやうにあらく物も申まじきなり。心和やわらくへきなり。觸光柔輦そつくわうじゆなんの願あり。又信しんなければ。我われになりて詞ことばもあらく

諍も必ず出來るものなり。あさましくよくよくこころうへし。

(御一代聞書)

一 信の上はさのみわろき事はあるまじく候。或は人のいひ候など

とてあしき事などはあるまじく候。今度生死の結句をきりて安

樂に生せんと思はんなり。いかんとしてあしきさまなる事をす

へきなど仰られ候。(御一代聞書)

一 信心治定の人は、誰によらず。まつみればすなはちたふこくな

り候。これその人のたふこきにあらず。佛智をえらるゝかゆへ

なれば。彌陀佛智のありかたきほごを存すへきことなり。(御一

代聞書)

一 聖教よみの佛法を申たてたることはなく候。尼入道のたくひの。

たふこやありかたやと申され候をきつては。人が信をこるこ前

々住上人蓮如上人仰られ候由に候。何もしらねども。佛の加被力の

故に。尼入道などのよろこはるゝをきつては。人も信をこるな

り。聖教をよめども。名聞かさきにたち。心には法なきゆへに

人の信用なきなり。(御一代聞書)

一 聽聞を甲も大畧我ためごは思はず。やゝもすれば法文の一をも

きゝおほへて人にうり心ありどの仰ことにて候。(御一代聞書)

一 前々住上人蓮如上人仰せら候。佛法者には法の威力にてなるなり。

威力でなくはなるへからすと仰られ候。されは佛法をは學匠物

しりは言ひたてす。たゝ一文不知の身も信ある人は。佛智を加

へらるゝゆへに。佛力にて候間。人が信をこるなり。此故に聖

教よみとてしかも我はと思はん人の。佛法をいひたてたること
なしと仰られ候事に候。たゞなにしらねども。信心定得の人は。
佛よりいはせらるゝ間。人か信をこるこの仰に候。(御一代聞書)
一人に佛法の事を申てよろこばれは。我はその悦ふ人よりもなを
たふとく思ふへきなり。佛智を傳へ申によりて。かやうに存せ
られ候事と思ひて。佛智の御方をありかたく存せらるへしこの
義に候。(御一代聞書)

一御文をよみて人に聽聞させんごも。報謝と存すへし。一句一言
も信の上より申せは。人の信用もあり。また報謝ともなるなり。
(御一代聞書)

一蓮如上人幼少なる者には。まつ物をよめと仰られ候。又其後は

いかによむごも。復せずは詮あるへからざる由仰られ候ちご物
に心もつき候へは。いかれ物をよみ。聲をよく讀みしりたるご
も。義理をわきまへてこそと仰られ候。其後はいかに文釋を覺
たりごも。信がなくてはいたつらごよと仰られ候。(御一代聞書)
一信もなくて大事の聖教を所持の人は。おさなき者に劍をもたせ
候様に思召候。(御一代聞書)

一ごをきは近き道理。ちかきは遠き道理あり。燈臺もこくらごと
て。佛法を不斷聽聞申す身は。御用を厚くかうふりて。いつも
のことと思ひ。法義にをろそかなり。とをく候人は。佛法をき
とたく大切に求める心ありけり。佛法は大切に求むるよりきくも
のなり。(御一代聞書)

一 一句一言を聽聞することも。たゞ得手に法をきくなり。たゞよく
きく。心中のこほりを同行にあひ談合すへきことなり。(御一代
聞書)

一人のわろき事はよくくみゆるなり。我身のわろき事はれほえ
さるものなり。我身にしられてわろき事あらは。よくくわろけ
れはこそ身にしられ候と思ひて。心中をあらたむへし。たゞ人
のいふことをは。よく信用すへし。我わろきことはおほえさる
ものなる由仰せられ候。(御一代聞書)

一 何としても人になをされ候やうに心中をもつへし。我心中をは
同行の中へうち出してをくへし。下ごしたる人のいふことをは
用ひすして必ず腹立するなり。あさましきことなり。たゞ人に

なをさるゝやうに心中をもつへき義に候。(御一代聞書)

一 十月二十八日の逮夜にの玉はく。正信偈和讃をよみて。佛にも
聖人にもまいらせんと思ふがあさましや。佗宗にはつごめをも
して廻向するなり。御一流には他力信心をよくこれとおほしめ
して。聖人の和讃にその心をあそはされたり。ここに七高祖の
御ねんころなる御釋のころを和讃にきつくるやうにあそは
されて。その恩をよくく存知して。あらたふこやと念佛する
は。佛恩の御ことを聖人の御前にてよろこひまうす心なりこ。
くれく仰られ候ひき。(御一代聞書)

一 蓮如上人仰られ候。佛法にはまいらせ心わろじ。是をして御心
に叫はんと思ふ心なり。の註釋なり佛法の上は何事も報謝ご存

すへきなり。(御一代聞書)

一佛恩を嗜むご仰候事。世間の物を嗜むなご云やうなることにてはなし。信の上にたふご難有存し。よろこひ申すさまに。懈怠申す時。かゝる廣大の御恩をわすれ申すことのおさまさよご。佛智にたちかへりて。ありかたやたふごやご思へは。御もよほしにより。念佛を申すなり。嗜むごはこれなる由の義に候。(御一代聞書)

一眞實信心の獲得したる人は。かならず口にもいたし。又色にもそのすかたはみゆるなり。(御文二帖目第五通)

一蓮如上人物をまきこしめし候にも如來聖人の御恩にてましく候を御忘れなしご仰られ候。一口きこしめしても思召出され候由

仰られ候。(御一代聞書)

一御膳を御覽しても。人のくはぬ飯をくふごよご思召候ご仰られ候。物をすくにまきこしめすことなし。たゝ御恩のたふごまきこをのみ思召候ご仰られ候。(御一代聞書)

一御膳まいり候時は御合掌ありて如來聖人の御用にて衣食よご仰られ候。(御一代聞書)

一佛恩の高大なること迷廬八萬の巔にこえ。師徳の深厚なること蒼海三千の底より過たり。故に佛祖の恩徳の深き事をおもふに。或は食味に向へはかれを食することに憶し。或は一衣を受るにも是を着することに念す。然は則ち晝夜不斷是を忘すこのたまへり。(遺徳記)

一又常^{つね}にの給^{たま}はく。聖人の御恩德^{ごおんとく}をば。夜は夢^{ゆめ}に見^み。晝^{ひる}は聊^{いささ}も忘^{わす}れずご仰事^{おほし}ありけり。(遺徳記)

一萬事^{ばんじ}に付てよき事を思ひ付るは御恩^{ごおん}なり。惡^{あしき}ことだに思ひすつるは御恩^{ごおん}なり。捨るも取るも何れもく御恩^{ごおん}なり。(御一代聞書)

一一心^{こころ}にたのみ奉る機^きは如來^{にょらい}のよくしろしめすなり。彌陀^{みだ}の唯^{ただ}しろしめすやうに心中^{しんじゆう}をもつへし。冥加^{みやうか}をおそろしく存すへきことにて候この義^ぎに候。(御一代聞書)

一蓮如上人の御時^{ごとき}には第一冥加^{みやうか}の方^{かた}を本^{ほん}に被仰事^{おほし}にて候由。各宿老衆^{しやくしゆうしゆ}申され候ひき。(實悟記)

一朝夕^{あしたけ}は如來聖人の御用^{ごよう}にて候間。冥加^{みやうか}のかたをふかく存すへき由。折折^{おれおれ}前々住上人^{ぜんぜんぢゆうじやうじん}上人^{じやうじん}仰られ候由に候。(御一代聞書)

一冥加の方。専ら可^べ存^{ぞん}の由。前住蓮如上人仰候にて實如上人も仰事候ひき。深く時々^{ときとき}尅々^{こくこく}萬の儀^ぎについて深く可^べ存^{ぞん}子細^{こさい}。兄弟中^{あなづち}存候は、今おさなしこも。成人^{せいじん}候は、堅固^{けんこ}可^べ申聞^{まうもん}の由。被仰

置候。(實悟記)

一前々住上人^{ぜんぜんぢゆうじやうじん}上人^{じやうじん}は御門徒^{ごもんた}の進上物^{しんじやうぶつ}をは。御衣^{ごんちやう}の下^{した}にて御おかみ候。又佛の物^{ぶつ}ご思召候へは。御自身^{ごじしん}のめし物^{もの}までも。御足^{ごあし}にあたり候へは御いたゝき候。御門徒^{ごもんた}の進上物^{しんじやうぶつ}。すなはち聖人よりの御あたへご思召候ご仰られ候。(御一代聞書)

一衣裳等^{いしやうどう}にいたるまで。我物^{わがもの}と思ひ踏^{ふみ}たゝくる事。淺間敷事^{せんまぬきこと}なり。悉く^{ことごとく}聖人の御用物^{ごようぶつ}にて候間。前々住上人は。めし物^{もの}なご御足^{ごあし}にあたり候へは御いたゝき候由。うけたまはり及ひ候。(御一代聞書)

一蓮如上人御廊下を御とほり候て。紙切のおちて候ひつるを御覽せられ。佛法領の物あだにせるかやと仰られ。兩の御手にて御いたゞき候と云云。總してかみのきれなんごのやうなる物をも。佛物ご思召。御用ひ候へはあだに御沙汰なく候の由。前住上人實如御物語候ひき。(御一代聞書)

一あたらしき御衣裳を蓮如上人は。めし候ては。御堂へ聖人の御前へ御まいり候て。めし物を被引出。御用にて御着候ご御申候躰にて候つるご宿老衆物語候。(實悟記)

一蓮如上人は御膳と被申候より。はや如來聖人の御用にて物をくふべきよご被思召候てよりは。御膳まいりはつるまで。御忘はてられたるごごなきご御物語候つるご。各宿老衆被申候。(實悟記)

記

一兼縁。堺にて蓮如上人御存生の時。背摺布を買得ありければ。蓮如上人仰られ候。かやうの物は我方にもあるものを。無用の買いごごよご仰られ候。兼縁自物にてこり申たるご答申候處に仰られ候。それは我物かご仰られ候。悉く佛物。如來聖人の御用にもるごごはあるまじく候。(御一代聞書)

一蓮如上人。兼縁に物を下され候を。冥加なきご御辭退候ひければ仰られ候。つかはされ候物をは。たゞ取て信をよくとれ。信なくは冥加なきとて佛の物を受けぬやうなるも。それは曲もなきごごなり。譯けもなしと。我するごおもふかごよ。皆御用なり。何事か御用にもるごごや候へきご仰られ候。(御一代聞書)

一同仰られ候。いかやうの人にて候ども。佛法の家いへに奉公ほうこう申候は
。昨日きのうまでは他宗たしゆにて候ども。今日ははや佛法の御用とこ
ろえへく候。たこひ商あきあひをするども。佛法の御用と心得へきと仰
られ候。(御一代聞書)

一人のこゝろえのとほり申されけるに。我心わがこころはたゝかこに水みづを入
れ候やうに。佛法の御座敷ござしきにてはありかたくもたふこくも存し
候が。やがてもこの心中となされ候と申され候ところところに。前々
住上人すまうじん上人じやうじん仰られ候。そのかこを水につけよ。我身わがみをは法ほふにひ
てゝおくへき由仰られ候由に候。(御一代聞書)

一前々住上人仰られ候。彌陀をたのめる人は。南无阿彌陀佛に
身をばまるめたる事なりと仰られ候と云云。彌冥加いまいかを存すへき

の由に候。(御一代聞書)

一丹後法眼蓮慈衣裳たんごほふけんれんじしやうとゝのへられ。前々住上人の御前に伺候しりぞ候ひ
し時仰られ候。衣ころものえりを御たゝきありて南无阿彌陀佛よと仰
られ候。又前住上人は上人じやうじん御たゝみをたゝかれ南无阿彌陀佛に
もたれたる由仰られ候き。南无阿彌陀佛に身をはまるめたるど
仰られ候と符合あひあ申候。(御一代聞書)

一我心わがこころにまかせずして心を責めよ。佛法は心のつまるものかと思
へは。信心しんじんに御なくさみ候と仰られ候。(御一代聞書)
一佛法には萬よろかなしきにも。かなはぬにつけても。何事につけて
も。後生ごしやうのたすかるへきことを思へは。悦よろこひ多たきは佛恩ぶつおんなりと。

(御一代聞書)

一蓮如上人の御掟には佛法のこそをいふに。世間のことにござりなす人のみなり。それを退屈せすしてまた佛法のことにござりなせご仰られたり。(御一代聞書)

一蓮如上人仰られ候。當流には總躰世間機わろし。佛法の上より何事もあひはたらくへき由仰られ候。(御一代聞書)

一たごひ正義たりと。しげからんことをは。停止すへき由に候まして世間の儀停止候はぬごしかるへからず。いよく增長すへきは信心にて候。(御一文聞書)

一當流の他力信心のひごをすゝめんごおもはんには。まつ宿善無宿善の機を沙汰すへし。これはいかん昔より當門徒に其名をかけたる人なりごも。無宿善の機は信心をとりかくじ。ま

ことに宿善開發の機はをのつから信を決定すへし。(御文三帖目第十二通)

一しかれは念佛往生の根機は。宿因のもようしにあらすは。われら今度の報土往生は不可なりとみえたり。このころを聖人の御とはに過獲信心遠慶宿縁ごおほせられたり。これによりて。當流のころは。人を勸化せんごおもふごも。宿善無宿善の二を分別せすはいたつらごなるへし。(御文四帖目第一通)

一時節到來ご云こと。用心をもして。其上に事の出來候て時節到來ごはいふへし。無用心にて出來候を時節到來ごはいはぬことなり。聽聞を心かけてのうへで宿善無宿善ごもいふごごなり。たご信心はきくにきはまる事なる由の仰に候。(御一代聞書)

一 いたりてかたきは石なり。至てやはらかなるは水なり。水よく石を穿つ。心源もし徹しなは。菩提の覺道何事か成せさらんこいへる古き詞あり。いかに不信なりとも聽聞を心にいれまうさは。御慈悲にて間候。信をうへきなり。只佛法は聽聞にきはまるところなり。(御一代聞書)

一 わが妻子ほご不便なることなし。それを勸化せぬはあさましきことなり。宿善なくはちからなし。わか身をひこつ勸化せぬものがあるへきか。(御一代聞書)

一 仰に身をすてゝをのくと同座するをは。聖人のおほせにも四海の信心の人はみな兄弟と仰られたれは。我もその御ことは如くなり。また同座をもしてあらは。不審なることをもこへか

し。信をよくとれかしこねかふはかりなりと仰られ候なり。(御一代聞書)

一代聞書

一 蓮如上人順誓に對し仰られ候。法敬と我とは兄弟よと仰られ候。

法敬申され候。是は冥加もなき御事と申され候。蓮如上人仰られ候。信をえつればさきに生るゝ者は兄。後に生るゝ者は弟よ。

法敬とは兄弟よと仰られ候。佛恩を一同にうれば。信心一致の

うへは。四海皆兄弟といへり。(御一代聞書)

一 兼縁夢に蓮如上人御文をあそはし下され候。其御詞に梅干のた

こへ候。梅干のことをいへは。皆人の口一同にすし。一味の安

心はかやうにあるへきなり。同一念佛无別道故の心にて候ひつ

るやうにおほえ候。(御一代聞書)

一蓮如上人は如何なる極寒にも御手水に水を御つかひ候。湯をま
 いらせ候も。冥加なき由仰られ候ひき。あまり極寒の折節。湯
 を少し御手水の中へ各かなしがり候て。いれられたる由に候。
 (實悟記)

一蓮如上人の御時は。毎夜座敷中の油火燈心を二筋ならではかき
 たてられず。あかりの御用の時は。いくすぢもかきたてらる。
 佛前のも當時のやうにふごくは御入なく候へつるとみななく申
 候。冥加をおぼしめされたるによりたる事なり。(實悟記)

一實如上人(蓮如上人)の御時は平生の供御以外に鹿相に御入候ひ
 き。各存知の方候へし。御汁もいかに鹿相にて御菜二つ。一
 向に見苦敷候。これは冥加を思召され候故にて。蓮如上人御時

よりの如くにてとて候。(實悟記)

一前々住上人(蓮如)仰られ候。家をつくり候とも。つぶりだにぬれ
 ずば何とも角ごもつくるへし。萬事過分なることを御さらひ候。
 衣裳等にいたるまでも。よきものきんご思ふはあさましきこと
 なり。冥加を存じ。たゞ佛法を心にかけよと仰られ候。

一前々住上人仰られ候。かむごはしるごも。のむごはしらすなど。
 いふことかあるぞ。妻子を帶し。魚鳥を服し。罪障の身なりと
 いひて。さのみ思のまゝにはあるまじき由仰られ候。(御一代問書)
 一何よりも親に不孝なる人は蓮如上人第一きらひにて候。(實悟記)
 一親に不孝の人は一段と曲言の由仰られ。折々御折檻の事に候。
 親に孝行なる人をは一段と御崇敬の事にて候。蓮如上人以來か

くの如くに候。(實悟記)

一昔は東山に御座候時より。御亭に上檀御入候ご各物語候。蓮如上人御時。上檀をさげられ下檀と同物に平座にさせられ候。その故は佛法を御ひろめ御勸化につきては。上臈ふるまひにてはなるへからず。下主ちかく萬民を御誘引あるへき上は。いかにもく下主ちかく諸人をちかく召て御すゝめあるへきとの御事にて候仰られ候て。平座に御沙汰候。ありがたき御こと、諸人申たるごて各宿老衆かたり申され候。(實悟記)

一佛法の讚嘆のとき。同行をかた／＼ご申は平外なり。御方々ご申てよき由仰ご候。(御一代聞書)

一前住上人仰られ候。御門徒衆をあしく申ことゆめくあるまじ

きなり。開山の御同朋御同行ご御か／＼つき候に。聊示に存ずるはくせごこの由仰られ候。(御一代聞書)

一開山聖人の一大事の御客人と申は。御門徒衆の事なりご仰られし。(御一代聞書)

一實如上人の御子。御物語の次に仰らるゝ事には。愚老が耳を引さよせられて仰には。本寺の住持もつ者は。はしに目鼻をつけたるやうなるものなりごも。皆門徒以下の人は賞翫すへしごころへあるへし。聖人の御代官を申す身にて候間。敬むへきか肝要なり。かやうのことは異人にはいふまじ。お主なればこそいふぞご仰せ侍るなり。(實悟記)

一蓮如上人御内衆へ度々堅く仰せつけられ候事は。然るへき御内

衆案内せしめ候ひつる人を。またせ申事は。曲事細々仰られ候。(實悟記)

一遠國より上洛の大坊主衆上洛の時は。必ず御對面の時も肴雜煮なごにて麁相には御入なく候。末々の衆遠國より上洛の御門徒衆にも。雜煮のやうなる物。よき御肴も蓮如上人の御時よりさせられ。聊も悪くこしらえ候ては。くせことたるへきの由。度仰られたるにて。此儀實如上人御物語候ひつるは。前住蓮如上人の御時。雜煮を仰せ付けられたるを召しよせられ。まづきこしめしたるに。いかゞ鹽をからく味ひ。わろくこしらへたるを出したると御尋候て。その中居衆御折檻候ひつるハ。遠國よりはるくこ上られ候聖人の御門徒の人に。かやうにわろく肴

をこしらへたる曲事の由仰せ出され。御折檻の由を實如上人御物語候て。前住様はかやうに御門徒を大切に思召候へつるとも。我は左様にもおもはず候。不信のいたりあさましく候と實如上人御亭にて御物語候ひしをうけたまはり候。(實悟記)

一宗之繁昌と申は。人の多くあつまり。威の大なる事にてはなく候。一人なりとも人の信を取るか一宗の繁昌に候。然は專修正行の繁昌は遺弟の念力より成すこあそはされをかれ候。(御一代聞書)

一蓮如上人仰られ候。何たる事をきこしめしても。御心にはゆめく叶はざるなりと。一人なりとも。人の信をこりたる事をさこしめしたきと。御獨言に仰られ候。御一生は人れ信をこらせ

文學博士南條文雄師講述
 ●梵文阿彌陀經 冊一 郵定價 四十錢
 織田得能師講述
 ●八宗綱要 冊一 郵定價 八十錢
 大内奇辨居士講述
 ●原人論 冊一 郵定價 二十五錢
 前田慧雲師講述
 ●天台西谷名目 冊一 郵定價 三十錢
 織田得能師講述
 ●大乘起信論義記 冊一 郵定價 九十錢
 藤谷源由師講述
 ●華嚴學乘 冊一 郵定價 拾八錢
 織田得能師講述
 ●七十五法名目 冊一 郵定價 四十五錢
 織田得能師講述
 ●佛敎大意 冊一 郵定價 貳拾錢
 前田慧雲師講述
 ●正信偈 冊一 郵定價 貳十二錢
 村上專齋師講述
 ●因明學大意 冊一 郵定價 三拾錢
 池原雅壽師講述
 ●因明三十三過本作法 冊一 郵定價 四錢

姬宮大圓師講述
 ●菩提心論 冊一 郵定價 十三錢
 釋清潭師講述
 ●大乘止觀頌 冊一 郵定價 貳錢
 大内奇辨居士講述
 ●碧巖錄第十 冊一 郵定價 五拾錢
 釋宗海師講述
 ●寶鏡三昧 冊一 郵定價 六錢
 江村秀山師講述
 ●滄海要路 冊一 郵定價 六錢
 高田道見師講述
 ●十玄談 冊一 郵定價 六錢
 大内奇辨居士講述
 ●般若心經 冊一 郵定價 十四錢
 釋隆謙信師講述
 ●佛說法滅盡經 冊一 郵定價 二錢
 釋隆謙信師講述
 ●俱舍宗大意 冊一 郵定價 四十五錢
 ●三十唯識論 冊一 郵定價 四錢

明治三十一年四月十一日印刷
 明治三十一年四月十五日發行

編輯者 織田得能

東京市淺草區松清町六十一番地

發行者 平本正次

東京市神田區駒河臺四紅梅町十二番地

印刷者 三島宇一郎

東京市神田區美神保町二番地

印刷所 弘文堂

東京市神田區美神保町二番地

發行所 光融館

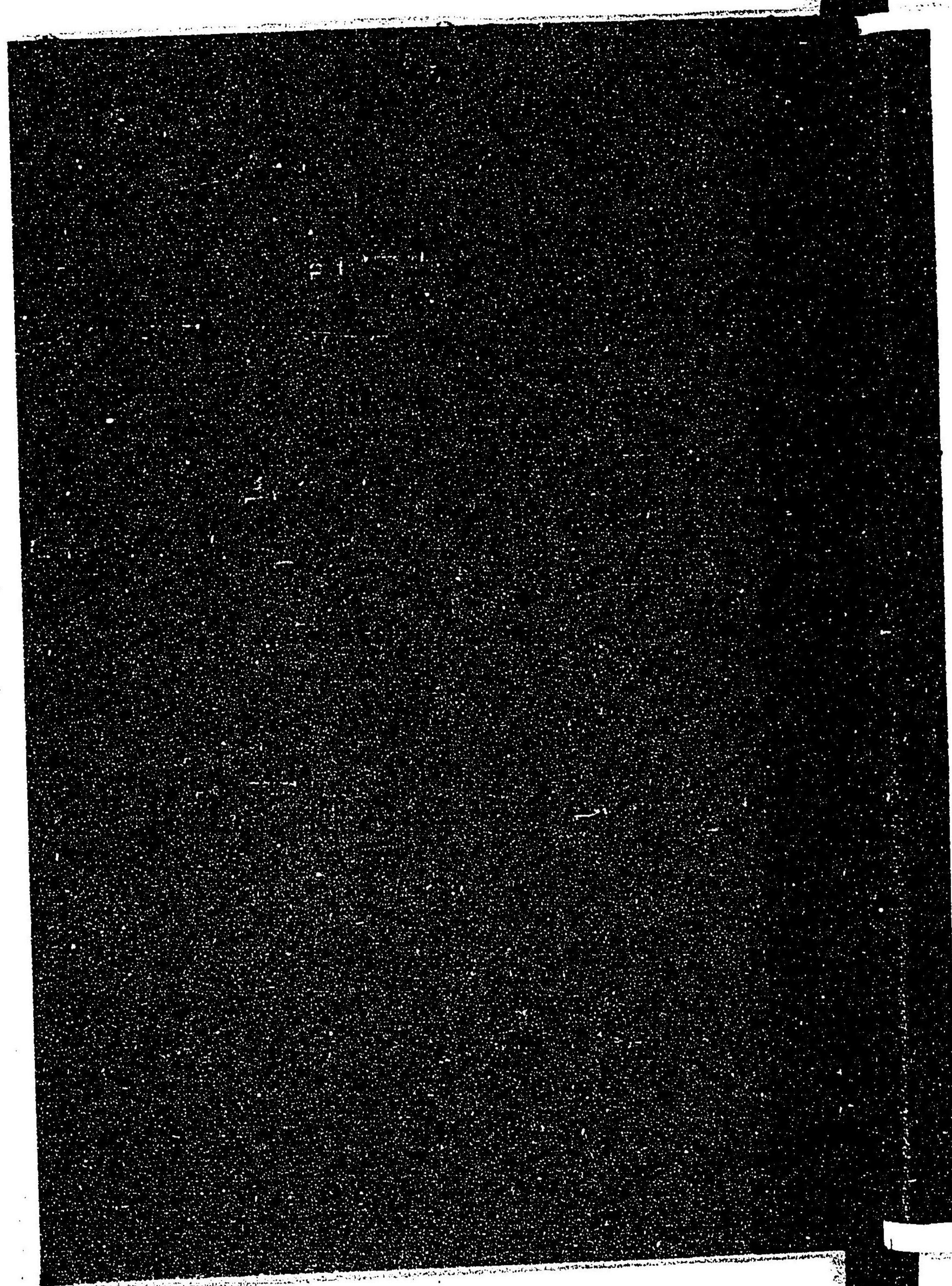
東京市神田區駿河臺四紅梅町十二番地



版權
所有

發賣所

越前福井市浪花町	越前福井市元上吳服町	名古屋市中區本町四丁目	大坂市東區本町四丁目	京都下京區五條通高倉西入萬壽寺町	京都油小路北小路上	京都東六條中珠數屋町	東京市淺草廣小路	東京市芝區露月町十八番地	東京市麻布區飯倉町五丁目
吉岡元治郎	酒井安兵衛	其中堂三浦兼助	金尾種次郎	西村十次郎	興教書院	法藏	朝倉	鴻盟	森江佐七



0

蓮如
上人御略傳並御垂訓

織田得能

国立国会図書館

019286-000-5

特47-860

蓮如上人御略傳並御垂訓

織田 得能/著

M31.4

ABF-2925



特

